

## 私が希望する未来の岩手

小田澤 美希

私は岩手県が好きだ。十年後の岩手は伝統芸能が大切にされている県であれば良いと思う。私は現在郷土芸能委員会に所属し、伝統芸能に携わってきた。私がやっているのは、「江刺家神楽」というものだ。昔、神信者の一人が県北地方に逃げ、付近の山伏達に教えたのがはじまりだそう。岩手の神楽の三大潮流の一つでもある。

小学生の頃にも神楽を習っていたが、その時は、やらされていた感じがあった。しかし、高校生になり伝統を受け継ぐ一人としての自覚が芽生え、改めて神楽のすばらしさを知った。小学生の時習わなかったら今でも続けていなかったと思う。実は江刺家神楽は、誰も受け継ぐ人がいなくなりそうであった。しかし、それを危惧し、高校生に受け継いでいかせようとした保存会会長の存在が大きい。その神楽を教えてくれたことを感謝したい。

神楽を通して感じたのは人と人とのふれ合いの大切さだ。神楽を教えてくれる保存会の方々、保護者など、みな温かい目でいつも見守ってくれている。何より嬉しいのは、地域のイベントや行事に参加した時に貰える拍手や言葉だ。私は太鼓の担当なので、夏祭りでは盆踊りの太鼓もやった。その時、全く知らない人に「女の子なのによくやってるね。これからも頑張る。」と言われたこともある。それを聞いたときとても嬉しかった。練習をやって嫌な時もあるが、こういうことを言われると、やっていて良かったと心の底から思うし、これからも続けていこうという意欲がわく。

私達だけでなく、岩手県の中にはたくさんの郷土芸能があり、高校生が主体となって伝承活動に携わっている学校も多い。岩手県高等学校総合文化祭の郷土芸能部門に私達も出場しているが、他の高校の発表を見ることができとても良い刺激になる。年ごとに構成を変えてくる高校もある。温故知新とはまさにこのことだと思った。古いものを大切にしながらも、そこから新しいものを作り出すというのは簡単そうだが難しいものだと思う。特に部活動として活動している学校はやはり気迫があり、感動する。郷土芸能に対する気持ちが違うんだなと思った。そこから私達も学ぶことがあるので、いい経験になる。

温故知新は伝統芸能だけでなく日常にも必要だ。古いから良い、悪いのではないし、新しいものが良い、悪いというわけではない。だから、古いことを学びそこから少しずつ新しく良いものに変えていくことが必要だと思った。そのためには身近な事から見つめ直していこうと思う。大きい事をやろうと言ってもすぐにはできないので、小さな事からコツコツと基礎から固めていかなければならない。あたり前の事だが、基礎をとばしていく人もいると思う。

このように伝統を守っていく中で、様々な事を学び、地域社会に貢献し、人間としても思いやりのある人になっていく。十年後の岩手は、今郷土芸能をやっている人が子供達にその伝統を伝えていくような人と人のふれ合いが大切にされる岩手であってほしい。私もその一人になれるよう、郷土芸能をやっていたことを誇りにもち生活していきたい。昔からある伝統がこれからも色あせることなく続いていければいいなと思う。無理して新しいことに挑戦するのではなくて、昔のことを伝えそこから何を学ぶかが大切だと思う。